



令和4年度日本赤十字社放射線技師会学術総会  
会員研究発表 座長集約

本セッションは乳房撮影、一般撮影の3演題の発表であったが、どの発表も自施設の検査を後方的に振り返り、検討を行っており、日常の検査をそのままにするのではなく、より質の高い医療を提供していこうという前向きな発表であった。日々の業務に追われ、なかなか振り返ることが難しい中で非常に貴重な検討を行ない、発表を聴講していた他施設の方も刺激になったと思う。発表された皆様ありがとうございました。今後もぜひ研究を続けていただき、発表してくださることを期待しております。

0-1 当院でのマンモトーム検査における患者負担軽減への試み

高知赤十字病院 高野里紗

装置の更新にあたり、検査時間の検討や装置マニュアル整備などをおこなったことについての発表であった。装置の更新によって検査時間の短縮があり、さらにトラブルシューティングを共有することで検査時間のばらつきが減少したということであった。業務改善としてまず患者の負担を軽減することは非常に有益であり、さらにステレオガイド下吸引式組織生検は患者に侵襲のある検査であることから、トラブルシューティングなどの共有、マニュアルの整備は必要不可欠である。今後も検討を続け、より安全にそして確実な検査となるように、研究を進めて欲しいと感じた。

0-2 マンモグラフィ装置の更新による違い

大分赤十字病院 木下実咲

演題取り下げ

0-3 当院におけるマンモトーム生検の現状

那須赤十字病院 相馬美咲

ステレオガイド下吸引式組織生検を行う装置を導入したことで、従来のステレオガイド下フックワイヤー挿入法との結果を振り返って検討した発表であった。フックワイヤー挿入法より吸引式組織生検は侵襲度が低いため、手技の割合としては吸引式組織生検に移行しているが、症例によってはフックワイヤー法が第一選択されることもあるとのことであった。今後は、スペーサーを用いた手技などで幅広い症例に対応できるようにすることを検討していた。スペーサーなどは自作で作成することも可能であるので、是非スペーサーを用いて乳房厚が足りないことで検査が行えない割合を減らすことが期待される。今後も、手技を振り返り、検査の質の向上に努めていただきたい。

0-4 システマティックレビューを用いたデジタルX線画像の再撮影率改善  
和歌山医療センター 野口紫陽

デジタル化に伴い、アナログ時代とは異なる再撮影要件が増加したことから先行研究を元に後方的に解析することで、自施設ではどのような再撮影が多いのか、なぜ起きるのかを検討していた。装着物などは掲示物を作成することで改善されたとのことであったが、先行研究との比較で異なる点としてはディテクタ選択間違いが再撮影用件として多かったということが新たに発見され、その点についても改善策を行なっているとのことであった。一般撮影はデジタルになり、画像確認が瞬時に可能になったことから再撮影は増加傾向にあると考えられる。ここは隠れた被ばくとなり、患者への不利益でしかない。本研究のように自施設での再撮影について検討を行い、さらに改善を行うことは非常に重要なことであり、安全安心な放射線診断を行う上で欠かせないことである。今後も、検討を重ね、さらに他施設も取り入れられるような改善策があればまた発表していただきたいと思う。

**O-5 日常業務を想定した3Dカメラ使用による位置決め精度の検証**

愛知医療センター名古屋第一病院 安藤勇汰

今回の検討においては、患者の体表面に物体が存在する場合は、カメラによる位置決め精度が低下しアイソセンターとの誤差が大きくなる傾向にあると報告された。3Dカメラが赤外線を用いて距離を計測しているため、避けられない現象であると感じた。

基本的なことであるが、不必要な物は外し、カメラによる自動位置合わせの場合においても目視による確認が重要である。

小児の場合では、3Dカメラによる位置合わせとアイソセンターとの誤差が大きい傾向にあるようであり、被ばく線量にも影響するため、今後の検討課題にして頂きたい。

**O-6 2管球低管電圧撮影CT装置の導入効果**

北見赤十字病院 長島正直

造影 CT 検査において低電圧撮影を行うことで造影剤の低減が可能になることを利用し、年間の造影剤の薬価を抑えること出来たとの報告であった。今回の報告では90万円/月の削減であった。年間にとすると非常に大きな金額である。

新たな機能を用いて、病院の経営に還元していくことは非常に重要である。まだ調査中の為、長期間のデータがないようであったが、今後さらに検討を続けていただき報告をして頂きたい。

**O-7 ヘリカル式強度変調放射線治療装置における角度調整型頭部固定具の使用検討**

日本赤十字社医療センター 廣澤祐太

新たに導入した角度調整型頭部固定具において、補正角度が大きくなると想定 of 調整効果が得られないとの報告であった。今回の検討により、原因は周辺機器と固定具の干渉であることが判明した。

新しい機器を導入した場合は、機能の確認は非常に重要である。今回の様に実際 of 状況を想定した検討でなければ、発見できない現象であった。

今回の検討は臨床において非常に有用な検討であった。

O-8 核医学（SPECT）がDPC算定に及ぼす効果～神経系疾患（脳）領域～

愛知医療センター名古屋第二病院 猪岡由行

DPC 病院における入院中の検査については、包括となり容易に収益にはならない。演者は、核医学 SPECT 検査において特定疾患及びその他条件において診療報酬点数が上乘せされ増収につながる旨を検証した。診療報酬点数のシュミュレーションを行い個々の検査内容によっては増収につながる事が証明された。

質疑では、「DPC のシュミュレーションを自施設では行うのは難しいか？」では、手間は掛かるが、DPC コードと樹形図より出来るとの回答であった。技師が撮影だけでなく病院経営の為に、DPC 算定に注目し増収に寄与する事は、重要であると認識した発表であった。

O-9 個人被ばく線量計着用率改善の取り組み

松江赤十字病院 石倉靖也

厚労省の調査により、多くの医療機関で放射線従事者の被ばく管理が徹底されていないことが判明した、電離則第 8 条に従い個人被ばく線量計の着用改善に取り込んだ。演者は、対象者にアンケート調査を行なった。全体への啓蒙活動、各検査室での一括管理や個人専用防護衣に常時装着、検査施行医師に直接手渡しなど行い装着率を 84%まで向上させた。今後は 100%の装着を目指し啓蒙活動を行っていきたいとあった。

質疑では、「水晶体の被ばく線量はどのように測定していますか？」では、試験的に水晶体専用の測定器を導入していて導入検討中であるとした。演者は、どこの病院も技師が苦勞している所であり、従事者への啓蒙活動だけでは限界があるため院内での委員会などを利用して病院全体の課題として取り組んでいきたいとの発表であった。

O-10 医療被ばく相談室の立ち上げ~当院における医療被ばく相談対応への取り組み~  
深谷赤十字病院 石川里紗

医療法施行規則の改正に伴い、「患者の被ばく相談の記録と説明」が義務となった。医療被ばく低減施設認定の取得に際し、放射線管理士から3名が放射線被ばく相談員の資格を取得し相談室を立ち上げた。事前予約とし、十分な時間を確保した。相談内容の記録は、SOAP形式とし事例検討し記録に残している。院内に相談員がいることにより、部内教育も行える様になった。今後は、広報活動を充実させたいとの事であった。

質疑で、「被ばく相談対応で心がけていることはあるか？」との質問では、「もちろんデータも大事ではあるが、まずは傾聴する事が大切で相談者の心に寄り添った対応をすることを大切にしている」との回答であった。今後、各赤十字病院の被ばく相談対応の模範施設となる発表であった。